

内村鑑三における近代的自我

加 藤 智 見

はじめに

本稿は、内村鑑三における近代的な自我がいかにして形成されていったかについて、彼の誕生（一八六一）から米国での回心（一八八六）に至る過程を中心に検討し、考えてみるものである。

江戸幕府の崩壊の時期に儒教的な家庭教育を受けながら、新たな欧米思想の流入の中で彼はどのように生きていったのか。すなわち儒教的な思想あるいは日本に伝統する神々と接触しながらも、それを必ずしも発想の大前提とすることなく、欧米の価値観を取り入れ、個人としての価値判断によって自由に選択・批判する近代的な態度で自我を形成していったと思われる側面を、主として彼の内面的な宗教体験の過程を軸にして考察してみたいと思うものである。限られた紙数であるので本稿は単に問題提起にとどまるものである。

一

文久元年（一八六一）三月二十三日、鑑三は上州高崎藩士内村宜之の長男として、江戸小石川鳶坂上の武士長屋に生まれた。母はヤソといった。

鑑三によれば、「私の一家は武士階級に属していた。ゆえに、私は戦うために生れたのであって、ゆりかごのうちか

ら——*vivere est militare* “生⁽¹⁾くることは戦⁽¹⁾うことなり”——であつた。父方の祖父は満身これ武士であつた⁽¹⁾。そして「父は、祖父よりも教養があり、立派な詩歌をつくることができ、また人を統率する術を身につけていた⁽²⁾」というように、父宜之は指導力もあり藩の近代化にも努力した人物であり、同時に有能な儒学者でもあつた。

また母は、「働いてさえおれば、人生のあらゆる苦痛と悲哀とを彼女は忘れる。：彼女の小さな家庭は彼女の王国である。彼女は、どんな女王もおよばぬほどに、この王国を治め、洗いきよめ、養う⁽³⁾」女性であつた。佐幕派に属していたために急速に貧窮していく高崎藩士の妻としてひたすら働き、家庭のやりくりに生きた女性であつた。

ではこのような家庭に生まれた鑑三の幼い「自我」はどのように形成されていったのであろうか。

まず見逃せない点は、儒学者の父の影響である。「私の父は立派な儒教学者で、聖賢の書物や言葉は、ほとんどすべてそらんじていた。それゆえ私の初期の教育は、自然その方針に沿っておこなわれた⁽⁴⁾」。父が鑑三にほどこした儒教的な教育は、主として藩主への忠義、親と師への忠誠と尊敬であつた。それを鑑三は比較的素直に受け入れている。

『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』の中でもこのことを認めている。と同時に留意すべきは「これら儒教の教訓は、多くの自称クリスチャンらに授けられ、また抱かれてゐる教訓にくらべて、すこしも劣るものではないと私は確信している⁽⁵⁾」と言っている点である。むしろ儒教的な影響に誇りをさえ感じている点である。近代的な彼の自我形成の過程において、儒教的なものを単に古いものとして否定していない点にまず注意しておきたい。むしろ日本的なもの、東洋的なものとして彼の自我形成の核心的なものとなつてゐるとも言える。たとえば次のような記述を見れば明らかになるだろう。

「儒教では、孝は諸徳のもとなりと教えるが、これは『神をおそるるは知識のはじめなり』というソロモンの箴言と似ている。冬の最中に、やわらかい竹の子（東洋のアスパラガス）を食べたいという老父の無理な要求にこたえて、雪の下から奇蹟的に竹の子をさがし出した孝子のものがたりは、クリスチャンの子供なら誰でも心得ているヨセフの

話と同じく、わが国の子供たちの知りつくしているものである」と⁽⁶⁾というように、日本人の儒教的な倫理観とキリスト教のその類似性を指摘している。この点は端的に儒教を否定してキリスト教に入るというのではなく、さらには武士の在り方に儒教を応用した武士道的な生き方を否定するのでもなく、むしろそれを精神的土台にしてキリスト教を理解するという態度を予測させる。

さらには忠義や忠誠だけでなく、女性問題にもこのような見方から言いおよぶ。「婦人に対する異教徒の残忍性がしきりに取りさたされるけれども、東洋の經典は、そんなことを奨励してもいないし、またこの問題に対して全く沈黙を守ってもいない。われわれの理想とする母と妻と姉妹とは、最高のキリスト教女性にくらべても、さして劣るものではない。そののみか、キリスト教の高く引き上げる感化力を受けたこともないのに、その行為や性格において、実にすぐれた女性たちがいた」⁽⁷⁾。もちろん、これは儒教的な寛仁の態度であってキリスト教の女性観自体とは異なる。しかしこのように見てくると、儒教的な倫理観、武士道的な忠誠心等がキリスト教に勝るとも劣らないもの、むしろそのような要素をキリスト教信仰の土台にしていたことが考えられる。このような儒教的な影響が独自に彼の自我形成に影響を与えている点にまず注意をしておきたい。

それと同時に、別の意味で彼の自我形成に影響を与えた神道的なものに触れておこう。「私がもっとも崇め尊んでいたのは、読み書きと手習いの神であった。私は毎月の二十五日に、正式に潔斎し、供物をささげて、その神を祀った。…そのほかに、米作をつかさどる神がいた。…この神には、われわれの家を火事と盗難とから守り給えと祈ることができた。…このほかに、齒痛に苦しむ者をなおす神がいた。たえずこのつらい病気に悩まされていた私は、この神にも祈り求めた。…神々が多種多様なため、それぞれの神の要求が矛盾衝突して、一つ以上の神を満足させねばならぬ場合、良心的な人間の立場は悲惨なものになってしまう。こんなにも多くの神々を満足させ、またなだめねばならなかったから、自然私は、いらいらした、臆病な子供であった」⁽⁸⁾という。

この記述はキリスト教に回心した後になされたものであるから、複雑な心境がこめられている。しかし幼少の鑑三の立場に立つて考える場合、彼は誠実に几帳面に神々を崇拜していたと言うべきであろう。むしろあまりに真面目に神々のことを考えすぎて苦しんだとも思える。「遠まわりをして、社祠の数のすくない方の道を取り、良心の苛責をのがれようとしたこともあった⁽⁹⁾」というが、これは単に神々を忌避していることではない。幼少の頃から宗教的なものに目覚め、まともに誠実に神を考えすぎていたからだと考えるべきであろう。したがって、ただ単に神道を否定してキリスト教に転向したというような浅い公式的な理解は疑問である。むしろこのような真面目すぎるともいえるべきその態度こそが素地になって、後にキリスト教に入ってしまったとも言えよう。深く忠実なキリスト教への帰依と理解の底には、先にあげた儒教的な忠誠心と神道的な神々との接触からくる体験が存在していると考えられる。

その証拠の一つにもなると思うが、後に札幌農学校で半強制的にキリスト教に入信を強要されたとき、鑑三は札幌神社（現在の北海道神宮）に行った。「私は郊外の或る異教の神社に詣でた。：目に見えぬ神霊の象徴である神鏡にほど近く、枯れ草の上に身を投げ出して、堰を切ったように私は祈りはじめた。真心こめたその祈りは、後年私がキリスト教の神にささげたどんな祈りにも劣らぬほど純真なものであった⁽¹⁰⁾」。キリスト教入信以前に敬虔で強い宗教的心情が養われていたことを忘れてはならない。ただ古い伝統を否定して近代的自我を形成したというのではなく、伝統的神々の崇拜によって宗教的な心情が形成され深められていたことに留意しておかねばならない。つまり鑑三の「近代的自我」は単に古いものを拒否して形成されたのではなく、伝統への深い関わりを通して形成されていくのである。

さて、以上二つの精神的なものへの関わりが、まず鑑三の幼い頃の自我形成の核になっていると思える。すなわち長上への「忠義」「忠誠」、同輩や目下への「誠実」「融和」「寛仁」という儒教的な倫理性、そして常に神々を思い、崇拜し、神々の気持ちを汲もうとする神道的な宗教性の二つである。この両面は単に並行するものではなく彼の内に重層している。やがてこの両面はキリスト教信仰の基盤にもなっていく。

さて、もう一点、彼の幼少の自我形成につけ加えるべき要素がある。科学的なものの見方の萌芽である。

慶応二年（一八六六）六歳のとき、家族とともに江戸から故郷の高崎に移った。その後明治二年から四年にかけて、二年ほど石巻県の少参事に任ぜられた父に従って家族で石巻に移り住んだが、それ以外は明治六年（一八七三）十三歳で上京するまでずっと高崎に住むことになった。この高崎で彼は魚取りに熱中する。釣針などの釣り道具も自分で製造し修繕した。父の叱責も省みず碓氷川や烏川で魚を追いかけて、これを細かく観察した。このことが後に彼を科学好きにし、水産学を専攻させる原因にもなったのであろうが、留意すべきはこの観察の態度がやがて「私は自分自身を綿密な観察の対象として来た」⁽¹⁾というように、自己自身をも観察の対象にするという独自の態度を生んだと思われる点である。すなわち彼が常に「実験的な」態度を重んじ、後に自己の「罪」を深く偽りなく見つめ続けるようになる原因となっているように考えられる点である。自己の内省的な宗教体験を実験的にとらえる点は近代的自我形成、ひいては宗教の近代化の問題にまで関係をもつとも思える。

以上三点がすくなくとも鑑三の自我形成の原点的なものになっていると言える。ではこれ以後この三点の核はどのように彼の内面で深められ、変化させられるか。さらにその外にどのような要素が付加され、自我が形成拡大されていくかを次に考えてみよう。

二

ところで鑑三は確かに儒教的、武士道的な教育としつけを受けて育ったのであるが、現実の社会は確実にしかも激しく動いていた。明治四年（一八七一）には廃藩置県の実施により、特に佐幕派であった高崎藩の武士は落ちぶれていかざるを得なかった。彼の父も県少参事を免ぜられることになる。これはまた父の権威の失墜でもあり、過去の人になつていくことでもあった。さらには生活の糧を長男に頼ることもなる。鑑三はこれ以後父を養う重荷を背負う

ことになる。

しかし彼の父は、幕末のとき藩の軍制を洋式にすることを主張したように進歩的な面をもっていた。そこで父は時代の流れを見、鑑三に新しい学問をさせ、新たな世界で役人にさせようと考えた。この考えは佐幕派のために落ちぶれた親が子に望んだ当時の共通の願いでもあった。鑑三としても没落していく父と家を見ると、そうせざるを得なかったであろう。このような重荷を負った旧幕藩の子弟たちは禄を奪われた父に代わって新たな価値観を求めて「青雲の志」を抱き、「立志」を胸に刻み、新天地を求めることになる。鑑三も後に書いている。「余は武士の家に生れた者であるから、余の父は余の幼少の時より余を役人に為さんと欲した、彼が其貧しき家財を投じて余に僅か計りの学問をさせて呉れたのも所謂余の青雲の志を達せしめんためであつた。それ故に余が明治の初年に大学予備門（今の第一高等学校）に通学し居る頃は余は専ら政府の役人に取り立てられんことを欲した者である、余の父は余が大学に入て政治又は法律の学を修めんことを望んだ者であつて、余も亦出来得る丈父の志に従はんと欲した」⁽¹²⁾。

明治六年（一八七三）、彼はまず東京赤坂の通称有馬学校（正式の名称は報国学舎）に入学した。この学校は佐幕派であつた有馬氏が今後優秀な人材を育成し国に報ずるという趣旨のもとに発足させた学校であつた。男女共学で進歩的であり、英語も外人教師を雇い厳しい教育をした。また寄宿制度であつたため鑑三も初めて親元を離れた。この学校で約一年間学ぶのであるが、この時期では次の点に留意しておきたい。

「ある日曜日の朝、一人の学友が『外人居留地の某所へいっしょに行かないか。きれいな婦人たちが歌をうたうし、それから、長いあごひげをつけた、背の高い男が、高い壇の上で、両手を振りまわし、身体をくねらせ、実に風変りな様子をして、叫んだり、わめいたりしているのも見られるよ。しかも入場は一切無料なんだ』と言って、私を誘つた。これが友人の目にうつったキリスト教会堂の礼拝の様子で、当時の私にはまだ耳新しい外国語で行われていたものである。私は友人とともに初めてそこへ行つたが、べつに不愉快な所とも思わなかつたので、その後は日曜日ごと

にそこへ通った。：私に英語の手ほどきをしてくれていたあるイギリスの老婦人は、私のこの教会通いを非常に喜んだ⁽¹³⁾。

この外人居留地は築地にあった。そしてこのイギリスの老婦人とは有馬学校で英語を教えたピアソンという女性教師である。この女性から当時新約聖書物語を一冊もらっていた。問題は後に鑑三が四十八歳のときに次のように書いている点である。「余は終にはキリストに捕虜にせらるべき者であった、余は幼時よりの神信心であった、爾うして東京青山に於て始めて英国女教師某（宣教師に非ず）より新約聖書物語一冊を貰い受けし時に余は既にジーサスクライスト（余は当時未だ主の名を日本音に於て知らざりし也）を拝せんと⁽¹⁴⁾の念を起した」。つまり幼時よりの神信心、この神はすでにあげた日本の神々であり、またピアソンから新約聖書物語をもらったときにイエス・キリストを拝しようとの念を起したという点である。札幌で初めてキリスト教に接したのではなく、すでにこの時期にキリスト教に触れ、しかもキリストへの崇敬の念をもったことに注意したい。さらにまた、この崇敬の念が幼児期よりの真面目で律儀な神々の信仰と結びつけられてとらえられている。このことは幼児の頃から神的なものへの感受性が深かったこと、決して心底から日本の神々を否定し去ることがなかったこと等が考えられる。仏教に対しても、その教团的な墮落した面に対しては非難をしても真面目な求道的な人々には深い尊敬の念をもつことになった。またこのような点はやがて親が望んだ法律を学び役人となるという、いわゆる立身出世からはずれた道を歩み始める原因ともなっていると考えられる。

いずれにしてもこの頃に宗教的な内面的な問題の最初の芽生えがあったことに留意したい。またそれがいわゆる「青雲の志」「立志」といっても一口に常人のそれとは少し違ったものにさせる原因になると思われる点を問題提起しておきたい。

明治七年（一八七四）十四歳のとき、東京外国語学校の試験に合格し、下等第四級に編入された。この学校は後に

東京英語学校、東京大学予備門、第一高等学校となり、いわば官製のエリートコースになる。加藤高明、石川千代松、田中館愛橘、天野為之、佐藤昌介、高田早苗、宮部金吾、太田（後の新渡戸）稲造といった、後にさまざまな分野で活躍する人々と同窓になった。この学校では特に英語の新しい教育の仕方に感動したといわれる。途中一年の休学をはさんで三年ほどこの学校で学ぶ。明治十年にはこの学校は東京大学予備門となり、これを修了すれば東京大学に進むことができるようになった。

だが、ここに彼にとっての大きな転機が訪れることになる。東京大学に進まず、よく知られているように、新しく設立された札幌農学校に進むことになる。東京大学に進めば、いわゆる青雲の志も達成しやすく、政治家、役人にさせようとした父の希望を実現するためにも有利になる。なぜ当時未開の地であった北海道にあえて渡ろうとしたのであろうか。

予備門の最後の級に在学していた明治十年六月十四日、北海道開拓使堀誠太郎が学校を訪れ札幌農学校の官費生募集の演説をした。彼は北海道の開拓について熱弁をふるい、さらに北国の自然風物を紹介した。そして最後に官費制度について詳しく語ったという。貧しい士族の子弟にとって官費であることは大層魅力であった。鑑三がそれに魅力をおぼえたことは想像にかたくない。しかしあえて札幌行きを決断させた理由はそれだけであつたろうか。たとえ貧しくとも父は子に政治家、高級役人になることを望んだ以上、大学卒業までの何らかの金銭の考えはあつたはずである。また鑑三自身も立身出世を中心に考えていたならば、やはりどんなことをしても東京大学にかじりついていただろう。何か他の理由もあつたのではないか。

私は、先にあげた病気による一年間の休学の間に、何らかの内面の変化があつたのではないかと思う。青雲の志をもち、激動の時代に一年間休学し、無為な時間を送ることは辛いことである。その間に立身出世の何か空しさのようなものを感じたのではないかと思えるのである。後に信仰を求めて激しい求道生活を送った鑑三にとって、病気を転

機に出世のみを求めて勉強することが空しいことであると気づくことは以外に容易であつたと思われる。この頃のことについて述べている。

「然しながら余は其頃より何にやら政治に対して興味を有たなんだ、政治など有つて無きが如きものに心を寄するのを何となく無益のやうに感じた、故に余は父の志に叛いて政治を学ぶの念を放棄した、余の同級の諸士にして、其後政治法律を修められた人々は今は夫れぐ大政府の弁護者の地位に居らるゝなれども、余は断然其時政治に暇を告げて、今日に至るまで未だ曾て日本国の政治家となり、又は其憲法学者となり、又は其裁判官とならんと欲するの欲望を懷いたことはない」⁽¹⁵⁾。

官費の特典があるとか青年らしい未知なる北海道への憧れももちろんあつたであらうが、この内面的な変化を看過するわけにはいかない。宗教的良心を生涯にわたつてもちつづける彼において、全く突然札幌農学校で宗教的になると考えるのはむしろ不自然であると思われるからである。日本の神々を思い、あの神もこの神もと崇拜しすぎてとうとう苦しくなつてしまつたほどに宗教的な感受性をもち、築地の教会に通いながらキリストを崇拜しようと思つたことを考えると、一年間の無念の休学の間に内面的な変化が起こり、政治や法律を学び出世のみを求める自分の姿に何か空しさをおぼえたのではないだろうか。もちろん青雲の志、立志そのものを失つたのではない。志の目標が変化したのではないか。その目標が堀誠太郎の演説等によつてはつきりしてきたのではないだろうか。

「余は政治を棄て農業を以て国家民衆を益せんとした、余は思ふた政治の目的は名誉を得るにあつて、農業の目的は饑^{うえ}を癒すにあると、さうして実物は空虚よりも估值^{ねうち}があるゆゑに農業は政治よりも大切であると思ふた」⁽¹⁶⁾。本来求道的、宗教的な自我が形成されつゝあつた鑑三にとってこのような心の変化を生むことはある意味で自然なことである。後にピューリタンのものに共感をおぼえるようになったこととも関係すると思える。

札幌行きが決まつた学生たちは、芝の開拓使御用宿で一カ月間の合宿に入る。この際鑑三は、岩崎行親、大田稻造、

宮部金吾とともに立行社というグループを作り、身を立て道を行うために、酒色や煙草をたしなむことを禁じることが誓いあった。この点からも分かるように鑑三の札幌行きは、時代の名譽と出世を求めるのではなく、おのれの良心と信念に従って新たな船出をしようとする倫理的な決意によるものだったと言えよう。この倫理的、宗教的な態度はやがて北海道で決定的な変化を遂げるが、以上のような側面に激動の時代に形成されていく鑑三の独自の近代的自我の一側面を見ておきたい。

三

明治十年（一八七七）七月二十七日、札幌農学校の第二期生として入学を許可される。八月二十八日、品川を出港し小樽に向かい、九月三日に札幌に到着する。九月十五日に授業が開始される。

この農学校は北海道開拓のために設立された官立の学校であり、主として米人によって開拓者的な精神と実用的な科学を教えることに主目的が置かれていた。

しかしここで看過できないことは、創立時の教頭クラークのことである。彼は米国マサチューセッツ農科大学の学長であったが、時の開拓長官黒田清隆に向かってその教育のために聖書を用いることを承諾させた。官立の学校でキリスト教の聖書を用いること、まだ当時ほとんど日本には浸透していなかった聖書を教育の基礎として使うことは、いわば破天荒なことでもあった。これにはいろいろな意味が考えられる。しかしその強引なまでの方法にもかかわらず、それを宗教的な情熱と信念と感じ、圧倒され、やがてはその感化と影響を強く受けるようになった人々がいたということに留意したい。

クラークは植物学等自分の専門を教える際、聖書も教えた。そして自ら「イエスを信ずる者の誓約」(Covenant of Believers in Jesus)という誓約書をつくり、とうとう第一期生全員に署名させてしまった。その激しさの中に伝統的

に諾否を明確にしない傾向がある日本人的態度を破らせてしまった南北戦争従軍軍人の一徹さ、ピューリタンの一途さが感じられるが、十七、八歳の純粋な若者にはそれがまた魅力ある熱情に思えたのであろう。鑑三が札幌に到着したときには、クラークはすでに任期を終えて帰国していたが、彼の感化を受けた一期生たちが誓約書に署名させようとして待ちかまえていた。

鑑三は迷い、苦しんだ。学業の方は優秀であつた。最高点がいくつもあつた。生真面目な性格のため平生から勉強していたといわれる。当時この学校は成績優秀な者に賞金を授与していたが、もちろん鑑三はこれをもらっていた。しかしこの誓約書には苦しんだ。元来宗教的な感受性に乏しく、自国の宗教にあまり忠義心がない者にとつては、かえつて決断がつきやすかつたかも知れない。しかし元来宗教心があり、しかもあれほど日本の神々に関わつてきた鑑三にしてみればそれは納得できない。築地の教会に通いイエスを崇拜しようとしていた彼であつても、ただ情熱と強引さで押しまくる先輩の強制にはとまどいを隠せなかつたであらう。

入信前の鑑三は、「余は神を信ぜず、また悪魔をも信ぜず、ただ人間の心中に存在する一片の精神を信ず、能くその指導に従えば、人の人たる道をよ践むに足る」と言つたというが、素直な心情の発露であらう。強烈な人格的な神をもたず、原罪の思想、悪魔のごときものを知らない日本人、人間の中に清明な神性、あるいは悉有仏性を思う日本人の素直な気持ちは、強力な人格神を後ろ盾にして入信を迫る態度には従えなかつたのであろう。迫られれば迫られるほど逆にそれが日本の神々への裏切り行為になると思うようになった。「私は幼いころから、祖国を他のすべての国にまさつて尊び、祖国の神々を拝して、他国の神を拝してはならぬと教えられてきた。たとえ死をもつて強いられたとしても、祖国の神々以外の神に忠誠を誓うことはできないと私は考えた。異国に興つた宗教を信ずるものは、祖国に対する反逆者、国教に対する背教者となる」⁽¹⁷⁾。彼は思い余つて札幌神社に行つた。「私は鎮守の神に向つて、学校内の新しい宗教熱を速かに消しとめ、邪神を捨てることを頑としてこばむ輩を罰し、今、自分のささえている愛国の大義に

関する小さき努力を助け給えと祈ったのである⁽¹⁹⁾。

すでに指摘したように幼少期の彼の自我形成の重要な要素となった儒教的な倫理性、神道的な宗教性が、圧倒的な入信の強制に対して激しく反抗する。実はここに近代的自我形成の新たな問題があるが、特に後者の多神教的、調和的要素は一神教的、排他的なキリスト教的宗教観と激しくぶつかる。鑑三はどのような態度をとったか。

「私は今でも、あんな威圧に屈すべきではなかったのじやないかと、時折り自分に問うことがある。しかし当時の私はわずか十六歳の少年であつたに反し、『加入せよ』と強制する上級生たちは、みなはるかに年上だったのだ。こういうわけで、キリスト教への私の第一歩は、自分の意志に反して強制されたもので、実を言えば、多少自分の良心にも反したものだつたのである⁽²⁰⁾。この時点では、とにかく強引に入信させられたと言える。

しかし一端入信を決断すると彼の宗教的心情は一気に燃え上がる。もともと日本の神々に深い心情を寄せていた。ただそれがあまりに律儀だったがゆえに神々の間に挟まって苦しんでいたのである。これが対象がただ一神になると、その宗教的な心情は一気に一神に注ぎこまれる。まだぬきさしならない深刻な原罪的な罪の意識による回心ではなかった。ある意味で多神に向けられていた敬虔な思いが一神に向けられ、明確な祈りの対象を得た安堵感と喜びに結びついたようにも考えられる。「神々にかつてささげた全ての誓い、神々の怒りをなだめる種々の形式の拝礼は、この唯一の神を信ずることによつて、今や無用のものとなった。しかも私の理性と良心とは、『そうだ』とそれにこたえるのである！ 神は一人だ、多数ではないとは、私の小さな魂にとり、何とうれしい知らせであつたことか！⁽²¹⁾。半強制的で強引な勧誘に屈して「自分の意志に反して」署名した鑑三は、その後しばらくは一人苦しんだものと思われるが、彼の理性と良心をして「そうだ」と言わせたのは何であつたのか。彼の魂に安らぎとなつたものは何であつたのだろうか。

私はここにある意味での近代的自我の決断と選択の姿勢を感じる。血縁と地縁を大切にし、祖先神としての神々を

崇拜し守ってきた日本人が、全く由来と性格を異にする一神と対決し、選択を迫られる状況においてである。仏教が日本に伝来したときは、まだ個人的な選択と決断を要求される時代ではなかったし、仏教の「仏」は二者択一を迫るというものではなかった。しかし近代的な欧米思想から生まれた「自我」の前には、信じる対象はもつとも正しいと思われる唯一のものでならなければならなかった。キリスト教の一神と日本の神々を同時に信仰し崇拜することは矛盾することとなる。後の生き方からも分かるように、鑑三は特に妥協することができない人間でもあった。二つの信仰の形態の中で悩んだことであろう。しかし彼は多である神より一である神を選択した。否、選択させられてから一神の真実性を究明し納得したというべきかも知れない。いわゆる「原罪」的な罪を自覚し十字架のキリストの贖罪を通した回心はまだ米国での回心を待たねばならないが、生真面目で妥協を許せぬ気質、多神の中で真面目であったがゆえに苦しんだその苦しみが、圧倒的に決断と選択を迫ってくる人格神を受け入れた、と考えるべきであろう。しかしここにはもつとさまざまな原因がからまっていると思う。ただひたすら主君一人に忠義心をもち命をささげるべきという儒的、武士道的なものもそこにあったと思える。事実この頃の鑑三の信仰は倫理的な色彩が非常に強い。

しかしこれは端的に神道の神々を捨てたというようなものではない。むしろ神々への信仰を包み込んでなお高い信仰をキリスト教信仰の中に見いだしたと考えた方が彼の心情に近いと思える。いずれにしてもここに日本的な地縁、血縁を突き破り、従来の自我を拡大し「理性と良心」によって決断し選択するという近代的な合理性による「選択」の姿勢があったことを指摘しておきたい。

明治十一年（一八七八）六月二日、M・C・ハリスより洗礼を受けた。「永久に『忘れ』得ぬ日。H氏はアメリカから来ているメソジスト派の宣教師で、一年に一回、信仰上のことでわれわれを助けるためにおとずれるのである。彼の前にわれわれがどんな具合にしてひざまずいたか、またわれらの罪のために十字架につけられしキリストの名を告白せよと言われたとき、かたい決心のうちにも、どんなにふるえながら、アーメンと答えたかを、私は今でもよく覚

えている⁽²²⁾」と言っている。さらに同年十二月一日、メソジスト監督教会に入会した。先にあげた「イエスを信ずる者の誓約」の中に「いつにても適当な機会があれば、みずから試験と洗礼とを受けて、いずれかの新教の教会に入会することを、ここに約束する⁽²³⁾」と書かれていたことを守ったものである。

しかしまた、この日の日記に次のように書かれている点に注意しておきたい。「敬愛する宣教師の牧師H氏の再度の来訪に際し、氏の教派や他の教派について、ふかく吟味するいとまもなく、われわれは氏の教会に入会したのである。われわれはただH氏が善い人であることだけを知っていた。だから氏の属する教会もまた善い教会のはずだと思ったのである⁽²⁴⁾」。さらに翌年十月十七日の日記には「われらの聖き仲間が増しつあることは感謝にたえない。ただ一つだけ悲しいことは、この小さな町に、二つの教会ができる様子がはつきりしてきたことである。その一つは聖公会で、他はメソジスト教会だ。『主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ』なのにと、われわれは心の中で考えはじめた。その一つさえ、自分の手では建てられぬほど微力なわれわれが、なぜ二つのクリスチャン団体に分れなければならぬのか。信仰に入つてよりこのかた、われわれはここで初めて教派主義の害毒を自覚したのであった⁽²⁵⁾」と記されている。煩悶の結果やつと決断をして入った途端、宗教教団の宿命的な教派主義の問題に直面した。正直で武士気質の彼には我慢のできないことであつた。そう感じたのは鑑三だけではなかつた。そこで有志たちは教派主義のために働く外国人宣教師からの独立をめざすことになる。十四年には佐藤昌介たちとともに教会建設委員となる。翌十五年にはとうとう「札幌独立教会」を誕生させる。これは日本で初めて教派から独立した、いわば日本的な教会であつた。しかしこのことはきわめて重要な点であると思える。というのは当時の日本の政治、経済、文化等のさまざまな分野で、日本はほぼ西洋一辺倒であつた。これに対し自分の理性と良心とによる選択によつて種々の困難にも負けずに理想を貫き通した点である。ここに彼における近代的な自我が次第に本物になっていくのが見られる。

十四年（一八八一）七月九日、彼を鍛え、大きく成長させた農学校を卒業する。在校中の生活は『余はいかにして

キリスト信徒となりしか』に詳しく描かれている。成績はいつも優秀で首席であつた。卒業演説を「漁業モ亦學術ノ一ナリ」と題して行い、また卒業生を代表して告別の辞を述べた。

四

七月二十七日、「開拓使御用係准判任」の辞令を受け、就職する。水産を担当することになり、月給三〇円であつた。翌十五年二月には開拓使が廃止となり札幌県御用係になる。この月、『大日本水産会報告』の第一号に「千歳川鮭魚減少の原因」を発表し、以後この雑誌に多くの論文を掲載する。また九月には祝津村でアワビの生殖実験を始め、十月下旬には卵子を発見した。これには鑑三自身大きな自負をもった。さらに翌十六年二月二十四日、東京の大日本水産会で「漁業ト氣象学ノ關係」と題して発表した。

ところが鑑三は用が終つても札幌に帰らず、四月二十一日突然病氣療養を理由に札幌県に辞表を提出してしまった。六月三日辞表は受理された。

なぜ彼は突然やめてしまったのか。研究者として役人としてこれからというときであつた。しかし彼の心の中には大きな空しさが生まれていた。四月十二日の日記には、「意氣銷沈、元氣なし」⁽²⁶⁾と書かれている。確かに健康上の問題もあつたろうし、また鑑三も人間である。自分が首席で卒業したが、当時すでに太田（新渡戸）は札幌農学校で教えていたし、宮部は同学校の教員となるべく東京大学に派遣されていた。これら友人と自分を比較したこともあろう。しかし最大の理由は何であつたのだろうか。

「私は自分のうちに、一つの空虚な箇所のあることに気づいた。それは、宗教事業に活躍することによつても、科学実験に成功することによつても、満たされないものである。この空虚の正確な性質が何であるかを私は見きわめることができなかった。……いずれにしろ、現に真空は存在しており、それは何とかして、何かによつて、埋められね

ばならぬ。漠々たるこの宇宙の間に、自分に幸福と満足とを与える何かがあると私は考えた⁽²⁷⁾。この空虚・真空という言葉にこめられたものはどんなものであったか。これは、以後それを埋めるものを求めて彼は彷徨することになるのであるが、要するに役人の道も生物学者の道も当時までのキリスト者としての生き方でも満たされぬものであったということである。

後に彼は回想している。「余は第一に農商務省の役人達に失望した、彼等が事を為さんと欲するよりも官等を進められんことに汲々たるを見て余は役人たるのが実にイヤになった、余は思ふた、役所に来ては坐睡^{あねむり}を為し、家に帰つては酒を飲み、其他は長官に阿諛^{あゆ}を呈するのが人生最大の目的ならば人生とは何んと詰らない者ではないかと、それより余は益^{ます}す辞職の念を発した、…余は第二に日本国の漁夫に失望した、彼等の捕獲術に就ては唯嘆賞するの外はない、然しながら彼等の道德の低いには実に驚いた⁽²⁸⁾。希望に燃えて入った現実の世界に早くも挫折が訪れる。潔癖で妥協ができず、きわめて倫理的な彼の性格であつてみれば当然一度は訪れる挫折でもあつた。かといってこのような現実的挫折から逃れて科学的研究に没頭することによつて現実の醜さを忘れることもできなかった。人生の真の意義を見いだそうとする彼の宗教的倫理的な志向がそれを許さなかつたからである。

ではなぜ役人生活、研究生活を捨てて伝道者として立とうとしなかつたのか。ここに重要な問題があると思えるが、東京に戻つて目撃したクリスチャンの姿に彼は失望する。「日ごとに、また週ごとに、信者の友人や知人が増すにつれて、私の信仰は急速に感傷主義にかたむいていった。信仰談をかわす集会はしばしば節度をこえ、われわれは、周囲の暗黒世界を征服すべき厳肅な責任について思うよりは、クリスチャン仲間の茶話会や晩餐会について多く思うようになった⁽²⁹⁾」。役人生活にも研究生活にもキリスト者としての生活にも人生の真の意義を見いだせなくなつてしまつた。「かつて氏神に月まいりをしていたころの私は、道ばたの乞食にいつも何か実質的なものを与えるのをつねとしていた。然るに、キリスト教に改宗したこのごろでは、空疎な言葉だけしか与えない。ああわが魂よ、これではならぬ

だ！⁽³⁰⁾。素朴に神々を信じていた頃を懐かしむほどに、当時の生を空虚で空しい真空の生活と感じていたのである。ここに辞職の理由の一つがあつたのではないだろうか。

それでも生活のために六月には津田仙の学農社農学校の教師となり、十二月には農商務省農務局水産課に再びつとめることになる。

しかしここにもう一つ重要な問題がある。八月十五日、海老名弾正が牧していた日本組合基督教会安中教会で彼は講演をしたが、この頃同教会の女性会員の浅田タケを知ることになった。彼は心の真空の原因の一つとして「または、急に大人になつてきたために、伴侶を求める自然の欲求に抗しがたくて、こんな焦燥と空虚とを覚えたのかも知れない⁽³¹⁾」という思いをあげている。信仰も生きる情熱も分かち得た学校から醜い現実社会に入り、身も心も疲れ、空しさのみが残っていた二十三歳の彼の心には、信仰を同じくする女性の存在を求めるものがあつたのであろう。空しさと淋しさを埋めるためにも、生きた生活の中に信仰をしつかりと根づかせたいと思う気持ちがあつたと思える。鑑三とタケは急速に親密になり、秋になると両親に結婚の意志を伝える。タケは同志社にも学んだ教養ある女性であつた。しかし両親は反対した。特に鑑三の母はタケが「賢すぎる」という理由で反対した。この母の堅実な目はすぐにやってくる破局を見抜いていたようである。それでも二人は、翌十七年三月二十八日結婚式をあげた。タケは当時の女性としては常軌を逸したところがあつた。鑑三自身すでに結婚前に友達に不安をもらしたことがあるほどだった。

その不安はすぐに現実のものとなった。十月、タケは安中の実家に別居することになり、事実上離婚となる（正式離婚は二十二年）。

十月二十七日、親友宮部金吾宛てに英文の手紙を書く。苦汁に満ちた文であるが、この中にたとえば次のような記述がある。「私を助けてくれる者、私を慰めてくれる者、私とともに働いてくれる者と信頼していた彼女が、悪党であり、羊の皮を着た狼だということが判明した、∴私の良心と聖書とに問題の真の解決を求めてよく考えたすえ、私は彼女

を思い切ることを決心した」(she whom I trusted to be my helper, my consolator, my coworker, was found to be a rascal, — a wolf in sheep's skin.....asking my conscience and the Bible for the true solution of the problem, I determined to give her up.)⁽³²⁾。その原因はタケの異性関係とか当時としてはあまりに非常識な言動であったとかと
言われているが、鑑三自身直接語っていないので分からない。ただ問題はこの不幸を鑑三が次のようにとらえている
ことである。「私がこれまでに犯してきた罪はこれほどまでに多くの悲しみの原因になったのであろうか。すべての私
の友人のうちの誰が一体これほど苦い杯をかくも多く味わったであらうか。父よ、もしあなたが私を引き上げたまわ
ねば、私は沈む、沈んでいってしまうのです。この恐ろしい時にいる私にあなたを信じ身をゆだねる術を教えてください。あなた
が私を殺し給うてもなおあなたを信ずるような信仰を私にお与えください」(Have my sins which I
committed thus far, been the cause of so many sorrows to me? Who of all my friends have tasted so many of
such bitter cups? Father, I sink, I sink, unless thou liftest me up, Teach me to trust Thee during these horrible
hours. Give me such a faith as to trust Thee even Thou killest me.)⁽³³⁾。たとえ心の空しさ、空虚、真空状態を埋め
るためという、ある意味で不純な動機であったにせよ、鑑三なりに努力し、信仰をもつ女性を伴侶にし教えを実践し
ようとしたのである。しかし結果は惨めなものになった。だが鑑三は、神によって殺されているようなこの修羅場
においてなお神を信じるその信仰を求めようとしているのである。それまでは、神、義、愛、信仰といっても閉鎖社会
で教えこまれた観念的なものでもあった。しかし醜い現実社会に突き当たり、挫折し、たった一人の女性との愛の生
活も裏切られることによって自分の信仰がいかに観念的なものであったかに気づいたであろうし、それは完全に叩き
のめされた。しかし実はここに観念的な「悪」から実存的な「悪」、観念的な「神」から人格的に応答し迫りくる「神」
に出会い、端的に自身が神を信仰するその信仰から、神によって「与えられる信仰」に大きく飛躍していく重要な契
機が考えられる。すなわち以上のような苦しみが一年半後の米国での回心の重く深い契機になっていくのではないか

と考えられる点である。

このような心の傷の癒しを「国内で発見できなかった」鑑三は、「数百年にわたり、キリスト教が、疑う余地のないほどはつきりと権威をふるい、感化をおよぼしているキリスト教国には、われら異教出身者の想像も及ばぬ平安と歓喜とがあり、真理の誠実な探求者ならば、誰にせよ、それらをたやすく手に入れることができる⁽³⁴⁾と考え」た米国に向けて、十一月六日には横浜港を出航する。

五

「一八八四年十一月二十四日の朝まだき、狂喜した私の眼は、はじめてキリスト教国のかすかな影をとらえた。私はもう一度自分の三等船室に下り、そこにひざまずいて祈った⁽³⁵⁾」。この日サンフランシスコに着いたのである。さらに汽車で大陸を横断し、ペンシルヴァニア州イリーに到着した。札幌で鑑三に洗礼を授けたハリスの夫人のもとに十日間滞在した。この夫人の紹介で、十二月十八日、フィラデルフィア近くのエルウィンにあるペンシルヴァニア精神薄弱児養護院院長 I・N・カーリンに出会うことになった。ただ旅費だけをもって渡航した貧しい鑑三をカーリンはよく理解し、そこに年内の滞在を許し、一月から看護人として働くことを勧めてくれた。

この仕事は想像を絶するものであった。「二十余の自己⁽³⁶⁾を顧みざる人間⁽³⁶⁾を取扱ふは決して安易の業にあらず、彼等は朝夕口を嗽ぐ^{すす}の要と快とを知らず(彼等大概十五歳以上なり)、故に傍に付き纏ひて一々口中を検査せざるを得ず、彼等は糞尿を床中に遺すも若し他人の注意を加ふるにあらざれば何日たりとも之に安ずるものなり⁽³⁶⁾」という薄弱児を相手にするのである。朝から晩まで戦いの生活が始まる。しかしこれは鑑三自身との戦いでもあった。この悪戦苦闘は「流鼠録」にくわしく記されている。こうした戦いは約半年間続くが、彼はこの体験を通して次のことに気づく。「慈善、すなわち『人を愛する』事業は、『自分を愛する』傾向が徹底的に根絶されぬかぎり、わがものとはならぬことを、

私は発見したのである⁽³⁷⁾。

この「自己を愛する」こと、すなわち自己愛が罪の根源であることをこの時期に至ってはつきりと彼は自覚するようになる。これはちょうどM・ルターがエルフルトの修道院で罪に苦しみぬいて彼の罪の根源が自己愛 (eygen lieb) にあることに気づいたことに共通するところがある。事実鑑三もそのように言っている。「私の病院づとめは、マルチン・ルーテルのエルフルト僧院行きと、ほぼ同じ目的によるものだということだ。この手段をえらんだのは、世間がこの方面における私の奉仕を必要と思うたからではない。ましてや職業として（そのとき貧しくはあったが）それを求めたのではない。ただ『来らんとする怒り』から逃れる唯一の避難所として、そこをえらび、そこで自分の肉を屈服させ、靈的の清浄に達し得るように訓練して、天国を嗣^つぎたいと考えたのである。それゆえに、実のところ、私の動機は自己本位⁽³⁸⁾だった」。この自己愛、自己本意な自己自身による自己の浄化の欺瞞と偽善の中に彼はおのれの悪と罪を見据えていくようになる。「そしてその後のにがい経験のかずかずにより、利己主義は、どんな形をとってあらわれようとも、悪魔のものであり、罪であることを学ばねばならなかったのである。完全な自己犠牲と全面的な自己忘却にほかならぬ慈善の要求に応じようと努力するにつれ、生来の利己心は、あらゆるおそろしい罪惡⁽³⁹⁾となって立ちあらわれる。わがうちなる暗黒に圧倒され、打ちひしがれて、私は言いようもない苦悩に身もだえした⁽³⁹⁾。いよいよ彼の罪の根源が具体的な姿をとって彼を苦しめるようになる。ルターが「すべてのこのようなわざの中に、われわれは自分のもののみを求める自己愛以外の何ものも見いだすことができない⁽⁴⁰⁾」と告白したように。

そんな鑑三の苦悩にさらに迫り打ちが加かる。別れたタケから復縁を訴える手紙が何通も届く。彼女は四月に女兒を生んだ。しかし鑑三は復縁を拒絶する。六月十六日、タケの兄宛てに書いた書簡に次のような文がある。「浅田於竹愛姉」とはタケを指し「弟」とは鑑三自身を指す。「拙宅」とは鑑三の両親宅のことである。「嗚呼浅田於竹愛姉ヨ、愛姉ニシテ弟ニ一滴ノ御恵心ヲ垂ラル、ナラ、今日断然弟ヲ夫トスル念ヲ断タレ小兒ヲ直ニ拙宅ニ御渡被下⁽⁴¹⁾」。鑑三

は親や友人の反対や忠告を受け入れず、強引に自己愛のために行つたことを悔い、しかもその過ちをあたかも宗教的実践であるかのように振る舞つたことに深い罪と人間の悲しみを感じた。さらには不幸になるであろうわが子がこの世に誕生した。もはやおのれの力によつて靈的な清浄に達し得ることは不可能であることを思い知るようになる。ここに幼少の頃から築いてきた自信に満ちた近代的な自我が崩壊していく点を見ておきたい。

七月二十七日、エルウィンを去り、マサチューセッツ州グロースターに滞在する。ここではつきりと鑑三は伝道者になる決心をする。米国に到着したときは、貧しいながらもいろいろの夢をもっていた。しかし以上のような内的彷徨を経た今ではもはや残された真の道は伝道者以外にはないと思われたのであろう。真のあるべきおのれの自我を求めて彼はハーヴァード大学等の名ある学校に進まず、徳高きシーリー総長のいるアマスト大学に進むことを決心する。

九月七日、アマストに到着、翌日には札幌農学校に大きな足跡を残したクラークに会うことができた。そして十日にはアマスト大学に選科生として入学することになる。

ボストンから西方一〇〇キロの地にあるアマスト大学は自然に抱かれこじんまりとした静かな学校であつた。ハーヴァード大学にくらべ、智よりも徳を、事業よりも主義を、識量よりも鍛練を重んじた。そして何よりも日本にいるときからその「著書に接し、之を誦読し之を愛吟するを以て無上の快を感じし」⁽⁴²⁾シーリー総長がいた。シーリーは鑑三を暖かく迎え入れた。「瞬間にして予は一種異様の安逸を感じ、予をして彼を師と仰がんよりは友として交はらんとするの念を起さしめたり」⁽⁴³⁾というほど人間的に惹かれるものを感じた。シュプランガーは「宗教的な情熱 (die religiöse Glut) は、書物よりも人間によつてはるかに強く燃え上がる」⁽⁴⁴⁾といったが、鑑三はよい師にめぐりあつた。

この師によつて「七弗の銀貨」⁽⁴⁵⁾とギボンの「羅馬史五冊」のみをもつた貧しい学生は「二年間の授業料を免じ」られ「無賃にて寄宿舎の一室を」⁽⁴⁶⁾与えられた。この心からの好意に感謝し勉強に打ち込むと同時に誠実に自己の内面を凝視し、罪の問題について考えぬいた。シーリーの暖かい眼差しに見守られながら。

とうとう翌年三月八日、彼は回心に至る。当日の日記に次のように記されている。

「わが生涯におけるきわめて重大な日。キリストの罪のゆるしの力が、今日ほどはつきりと啓示されたことはなかった。今日までわが心を悩ませていたあらゆる疑問の解決は、神の子の十字架の上にある。キリストはわが負債をこごとく支拂い給うて、われを、始祖の墮落以前の清浄と純潔とにつれもどし給う」⁽⁴⁶⁾。

頑強な彼の自我は自己の力で「神に認められようとして」清浄になろうとしていた。しかしそれは端的に利己主義にほかならなかった。このような態度においては、十字架のキリストの贖罪の意味は分からない。自己愛を捨て、おのれを捨て、十字架上のキリストを仰がねばならない。この回心はシーリーの影響が強かった。後に鑑三は「セイリー先生は一日私を呼んで教へて呉れた。内村、君は君の衷^{うち}をのみ見るから可^いけない。君は君の外を見なければいけない。何故己に省みる事を止めて十字架の上に君の罪を贖^{あがな}ひ給ひしイエスを仰ぎ瞻^みないのか」といわれたと回想している。ここに自己に固執する鑑三の眼が十字架の上に転換させられるのである。その固執は謙虚さに転質され、信仰も神に賜わる信仰とされるようになった。

さらに四月十五日の日記には「ああ、主よ、私は自分の全き無能力と墮落とを認め、あなたの生命によって満たされんがために、あなたのもとに参ります。私は汚れています。あなたによって私をきよめたまえ。私には信仰がありません。あなたから信仰を賜わらんことを」⁽⁴⁸⁾と記しているが、ここに信仰すらも神から与えられるものと撤した信仰の在り方に至っている。

このような宗教体験の経緯は、ちょうどルターが師のシュタウピッツに苦悩を打ち明けると、シュタウピッツがルターに、救われているかどうか分からないときは、キリストが十字架上で君のために受けられたあの傷を見上げなさいと語ったこと⁽⁴⁹⁾、後にルターが「シュタウピッツ博士のおかげがなければ、私は生き地獄におちていただろう」⁽⁵⁰⁾と言っている点、さらにはルターが「われわれの罪はわれわれの良心においてよりも、キリストの傷において(in vulner-

ato Christo) 考えられねばならない⁽⁵¹⁾とするに至る点に深い類似性が考えられる。さらにまたルターにおいても究極においては「信仰はわれわれの内働き給う神の御わざ (werk) ⁽⁵²⁾」であり、「信仰は人間の行為ではなくて、神の賜物 (Gabe Gottes) ⁽⁵³⁾」であり与えられるものであった。こうして回心と深い信仰体験に入り、鑑三の自我は新たな自我に転換されていく。

二十年 (一八八七) 八月、同大学を卒業する。選科生として入ったのであるが、学校の好意によって理学士 (B・S) の学位を与えられた。シーリーの勧めによってさらに鑑三は九月、ハートフォード神学校に入学する。しかしこの頃極度の不眠症に悩まされることになる。「過ぐる三年間のはげしい精神的緊張によって、神経は不安定となり、もっとも悪性の慢性不眠症にとりつかれたからである。：私は神学に別れを告げ、異郷にさすらった間に得たものを手にして、帰国せねばならなかった」⁽⁵⁴⁾。

しかしこの異郷をさすらって得たものは大きかった。米国に来る以前の彼の空しさ、心の真空に襲われた自我は回心の体験によって打ち破られた。自己の力によって神の前に清浄となるというような傲慢な自我が深刻な罪との戦いと回心によって叩きのめされ、全く異なった自我にされた。ここにそれまで彷徨してきた自我が新たな自我に転換されたことを見ておきたい。

ただ留意すべきはこの回心以外の米国のキリスト教界の実状には失望した。渡米以前の鑑三はこれを理想視すぎた。退廃的だとさえ思われた。このことは、やがて鑑三の書く『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』が予想に反して米国ではあまり読まれず、かえってドイツや北欧で高く評価されたことによっても分かる。しかしこの鑑三の失望は逆に日本に対する伝道の期待と希望に変わる。愛する日本への伝道の情熱になっていった。

二十一年 (一八八八) 四月二十一日、サンフランシスコを出港し、帰国の途につく。

以上、二十八歳までの鑑三の近代的自我形成の過程をたどり、主要と思える諸点をそれぞれ問題提起してみた。今

後この諸点を有機的に関連させ、かつ壮年、晩年の彼の態度とも関係させることによって、近代自我形成の特質についての総合的な解明に進んでいきたいと思う。

注

- (1) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』(山本泰次郎・内村美代子訳、角川文庫)、一二頁。
- (2) 同、一二頁。
- (3) 同、一三頁。
- (4) 同、一五頁。
- (5) 同、一六頁。
- (6) 同、一五頁。
- (7) 同、一六頁。
- (8) 同、一七一―一九頁。
- (9) 同、一九頁。
- (10) 同、二二頁。
- (11) 同、一一頁。
- (12) 「余の従事しつゝある社会改良事業」(内村鑑三全集9、岩波書店) 四七二頁。
- (13) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一九―二〇頁。
- (14) 「回顧と前進」(全集15) 三三三頁。
- (15) 「余の従事しつゝある社会改良事業」 四七二―四七三頁。
- (16) 同、四七三頁。
- (17) 鈴木範久、『内村鑑三』(岩波新書) 一六頁。
- (18) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、二〇頁。
- (19) 同、二二頁。
- (20) 同、二二頁。

- (21) 同、二五頁。
 (22) 同、二九頁。
 (23) 同、二三頁。
 (24) 同、四〇頁。
 (25) 同、五八頁。
 (26) 同、九八頁。
 (27) 同、九七頁。
 (28) 「余の従事しつゝある社会改良事業」四七四頁。
 (29) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一〇三頁。
 (30) 同、一〇五―一〇六頁。
 (31) 同、九七頁。
 (32) 全集36、書簡二、一一四―一一五頁。
 (33) 同、一一五―一一六頁。
 (34) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一〇九―一一〇頁。
 (35) 同、一一四頁。
 (36) 「流嵐録」(全集3) 六二頁。
 (37) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一五七頁。
 (38) 同、一三五頁。
 (39) 同、一三五―一三六頁。
 (40) Eyn kurz form der zehen gepott, Eyn kurz form des Glaubens, Eyn kurz form des Vatter unszers, WA. 7, S. 212.
 (41) 全集36、一七一頁。
 (42) 「流嵐録」、七三頁。
 (43) 同、七四頁。
 (44) Spranger, E.: Psychologie des Jugendalters, Verlag Quelle & Meyer, Leipzig, 1927, S. 300.
 (45) 「流嵐録」、七五頁。
 (46) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一六八頁。
 (47) 「クリスマス夜話」私の信仰の先生」(全集29)、三四三頁。
 (48) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一八四頁。

- (49) 拙著『親鸞とルター』（早稲田大学出版部）、一九一頁参照。
- (50) Roland Bainton : Here I Stand, Abingdon, Nashville, p. 53
- (51) Resolutiones disputationum de indulgentiarum virtute, WA. I, S. 576.
- (52) Vorrede auff die Epistel S. Pauli an die Römer, WA. Die Deutsche Bibel, 7, S. 10.
- (53) Karl Holl : Luther, Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, I, Verlag von J. C. B. Mohr, 1932, S. 119.
- (54) 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一九七頁。